別紙

令和５年度　学力向上プラン（留意点入）

学校名　　中央区立佃中学校

学校の教育目標

・深く考え　実行する生徒　　・自ら学び　伸びていく生徒　　・励まし合い　助け合う生徒
・正義正しく　起立ある生徒　　・個性豊かで　たくましい生徒

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

未来を目指す生徒たちに「確かな学力」をつける。
‘①校内研究を通した授業改善・毎時間における学習目標と振り返り・問題解決学習・話し合い活動・体験学習
②少人数授業の充実　　③ＩＣＴ（デジタル教科書）・学校図書の活用（朝読書）　④区講師の活用

令和４年度「学習力サポートテスト」や令和４年度学力向上プランの検証結果、学校評価の結果等によって明らかになった課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国　語	・令和４年度「学習力サポートテスト」では、どの分野も全国平均を上回ったが、「我が国の言語文化に関する事項」においては若干上回るか、学年によっては下回った。学習習慣の質問への回答から、予習・復習が定着していない生徒が多いことがわかる。 ・定期考査等においても、知識・技能にあたる漢字の読み書き、語句の意味において結果が優れなかった。	・教材を読む際に語句の意味や読み方などの十分な確認ができなかった。 ・目標の提示による見通しの確認が不十分だったり、振り返りの時間を確保できなかったりした。
数　学	・教材を読む際に語句の意味や読み方などの十分な確認ができなかった。 ・目標の提示による見通しの確認が不十分だったり、振り返りの時間を確保できなかったりした。	全国学力学習状況調査では、データの活用の単元も含めて全国平均より上回っているが、他の単元と比べて低くなっているので苦手意識を持つ性とが多いと考えられる。
社　会	・令和４年度「学習力サポートテスト」の全体の正答率は全国平均を下回っている。特に「知識・技能」の問題の正答率が、学年が上がるにつれ、低くなっている。 ・点数の分布を見ると、１年生は上下の幅が広く、最も多いのが５０点台となっている。３年生も最も多いのが５０点台である。	・授業を聞いているだけで、アウトプットを行う機会が少ないため、知識が定着していない。 ・知識が定着していないため、知識の活用が出来ず、応用問題の正答率も悪くなっている。
理　科	・令和４年度「学習力サポートテスト」において、第１学年、第２学年は、全国平均とほぼ同程度だった。第２学年は、水溶液の性質の正答率が最も低かった。 ・第３学年は、観点「知識・技能」「主体的に取り組む態度」に課題が見られ、「前線の通過と天気の変化」の正答率が最も低かった。	・学習してから時間が経つと内容を忘れてしまう、学習している内容が理解できていなかったと考えられる。 ・小数の計算ができず、問題を解く前に諦めてしまう生徒がいた。 ・授業中に、生徒が考える時間や問題演習の時間を確保する必要がある。
英　語	・令和４年度「学習力サポートテスト」において、第一、三学年ではどの分野も目標値を上回った。一方で、第2学年においては「様々な英文の聞き取り」「語彙の知識・理解」において全国平均より下回っている。表現の能力において全学年とも、全国平均は上回って	・語彙力が少ないことが原因と考えられるので、極力教師の説明の時間を短くし、授業内にコミュニケーション活動等でアウトプットの機会を多く設ける。

	いるが、自治体平均に比べ一番弱い。 ・定期考査などから、全生徒の学力の定着に大きなばらつきがあるのがわかった。定期考査で２０点以下の生徒は、何がわからないのかがわからないという生徒が数名出てしまった。	・既習の内容を忘れている生徒が多くなっているので、既習事項も使いつつ、様々なシチュエーションで用いる練習を定期的に行う必要がある。Speaking→writing つながる活動を行い、パターンプラクティスで口頭練習した後文字化したり、自己表現問題の時間を多く設ける。
保健体育	前年度の新体力テストの結果より、柔軟性、瞬発力に課題が見受けられる。併せて持久力の向上を図るように工夫する。 保健の学習で基礎的な知識の定着が不十分なため、簡易的な反復練習や実態に即した課題提示から知識や生活の仕方の改善を図る。	補強運動の意味を理解することが定着しなかったのが原因である。 練習問題や生活に即した課題の把握と自身の健康向上に向けた取り組みを理解させる。

学力向上に向けた視点		年度末までの目標及び指標
①各教科	国語	「我が国の言語文化に関する事項」において、「令和５年度学習力サポートテスト」の全ての実施学年で、それぞれ参加校平均点を上回るようにする。
	数学	令和５年度の「学習力サポートテスト」において、基礎問題の正答率が目標値を超えるようにする。
	社会	・令和５年度「学習力サポートテスト」の全体の正答率が、全国平均を上回るようにする。
	理科	・令和５年度「学習力サポートテスト」の全体の正答率が、令和４年度の結果を上回るようにする。
	英語	令和５年度「学習力サポートテスト」の全体の正答率が、令和４年度の結果を上回るようにする。
	保健体育	継続的な補強運動や、種目に応じた簡易的な補強運動を計画し、実施していくこと。
②授業改善		「学習力サポートテスト」「東京都学力向上を図るための調査」「全国学力・学習状況調査」の結果分析を行い、授業改善を行う。生徒・保護者アンケートにおいて「授業改善に努めているか」の項目で８５％以上を目標とする。
③家庭との連携		Classroom を利用し、学校からのお知らせなど積極的に発信し、学校での生徒の様子や提出物などの確認など連携をとる。また、出欠の連絡やアンケートの回答など効率的に行う。
④体力向上		年間を通して体育において、筋力トレーニングと６００ｍのジョキングを行い体力の向上を図る。連合陸上大会において、自己の記録に挑戦させ、さらに体力を向上を図る。

【目標達成のための具体的な取組内容】

① 各教科	
国語	・目標の提示、振り返りの時間を工夫し、有効に活用する。 ・語句の意味の確認をする時間、自ら考えや意見をまとめる機会を増やす。
数学	・目標の提示、振り返りを毎時間行い、学んだ内容を明確にする。 ・少人数で授業を行い、区講師と連携して机間巡視を行い個に応じた指導を充実させる。
社会	・毎時間小テストを行い、知識の定着を図る。 ・授業の最後に振り返りを行い、学んだ内容を明確にする。
理科	・知識を定着させるために毎時間小テストを行う。 ・授業の最後に振り返りを行い、学んだ内容を明確にする。
英語	・ＩＣＴ機器の利用を効果的に行うとともに、効率的なノート作成など丁寧に指導する。 ・目標と振り返りを確実に行い、且つコミュニケーション活動による４技能の育成を図る。
保健体育	・毎時間の授業で目標を振り返り、生徒の理解を深めさせる。 ・生徒の実態、運動能力に合った補強運動を段階的に指導する。

②授業改善	
取組Ⅰ	学校評価アンケートにおいて、「授業改善に努めているか」という項目が生徒・保護者ともに８５％を超えることを目標とする。
取組Ⅱ	各教科で基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着を図るとともに、それを幅広く活用させる学習を通して、思考・判断・表現力の育成を図る。

③家庭との連携	
取組Ⅰ	授業評価アンケート・学校評価アンケート・外部評価委員会などにおいて、「授業や補習を工夫し、生徒の学力を高め、個性を伸ばしてくれているか」という項目が８５％を目標とする。
取組Ⅱ	学校での生徒の様子を学年だよりや学級だよりで伝えるとともに、気になることや心配なこと、頑張っていることなど電話で保護者に伝え、情報の共有を図り家庭と学校が協力して生徒を見守る体制を作る。

④体力向上	
取組Ⅰ	「東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣調査」の各種調査結果で、東京都の平均値を上回ることを目標とする。
取組Ⅱ	骨密度の測定を行い、自分の食生活・運動習慣を振り返る。

【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点		取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	国語	目標の提示、振り返りの時間の確保をすることで、指導と評価の一体化を意識することができた。	３年間を通じて漢字の読み書き、語彙など基礎知識の定着を図れるように指導する。
	数学	習熟度別少人数授業によって、学習内容の定着度に応じた指導を行った。年２回行っている授業評価アンケートによれば、授業の進め方に関する生徒の評価は高くなっている。このことから、個に応じた指導が充実できており、生徒の実態に合った授業展開ができていると考える。	発展・応用問題などの「思考力・判断力表現力」を必要とする問題を苦手とする生徒が非常に多い。 基本問題だけでなく、様々な問題に対応できるような指導をする。
	社会	プリントにふりかえりの欄を作ってことで授業評価アンケートで「学習したことを言語化できる」と答えた生徒が増加した。	小テストの頻度や、実施方法に改善の余地がある。頻度は出来れば週１回、実施方法は ICT 機器を活用するなど、考えていきたい。
	理科	計算の演習を行い、知識の定着を図った。また、実験結果を基に考察を通して授業の振り返りを行った。	実験の目的を明確にして、見通しをもって授業に取り組むようにする。また、演習を通して苦手な分野の補強を行う。
	英語	定期考査や単元別テスト、パフォーマンステストなどの結果をもとに、少人数学習集団の特性に応じた課題や教材を設定することができた。	読むこと、書くこと、聞くことの３技能をバランスよく身につけていくことが必要であり、特に読むことを重点的に習熟度別に指導していく。
	保健体育	生徒の実態、運動能力に合った補強運動を提示した。毎回の授業で目標と振り返りを行い、生徒の理解を深めることができた。	基本的な運動能力の低下、運動能力の二極化が見られるため、実態に合った補強運動や主運動の提示が重要であり、今後も課題である。
②授業改善		校内で『新しい時代を築く』生徒の育成　～ＰＢＬの実践を通して～」をテーマとし、各授業の研究授業を行った。また、年２回生徒による授業評価アンケートを実施するとともに、その結果を各教科ごとに分析し、研修会を行った。生徒との信頼関係をつくりながら授業改善を進めることができた。	日頃より他教科の授業を積極的に参観して、意見交換を行う時間を多く設け、それぞれの生徒を深く理解し、個別最適化された授業の展開を進めていく必要がある。生徒一人ひとりの学びが十分に保障できるよう更に授業研究を進めていく。
③家庭との連携		保護者アンケートの「学校は行事や学校公開などを通して、生徒の様子や生活がわかるようにしている」という項目において、９１％の肯定的な意見で	定期考査前は家庭学習の時間は確保できているが、そうではない期間の学習時間の把握が必要と考える。各教科で課題を出す等、ＩＣＴ機器を一層活用

	あった。家庭学習の時間について、定期考査前に課題を提示することにより、生徒の家庭学習の時間は各学年増えていることが、学習計画表等から読み取れた。家庭への連絡を密にしたことで、保護者にも家庭での協力をいただけている。	しながら取り組む。保護者アンケートに日頃の家庭学習について問う項目を入れたり、面談等を通して、家庭での様子をヒアリングしたりしていく。
④体力向上	補強運動の充実や学習活動量の充実を図り、生徒の活動時間を多く確保するように取り組むことができた。新体力テストにおいて、都の平均を超える項目が出てきた。	柔軟性がややかける項目であり、定期的に体育理論や補強運動の合間にストレッチ活動を導入して、柔軟性を高めるようにする。瞬発力に関しては都の平均を超えている学年が多く、ジャンプスクワットなどの取組が良かった。継続して取り組むことでさらなる成長を促すようにする。